

社会事象を自分ごととして捉える授業が備えるべき要件の一考察

一 中学校社会科地理分野における生徒の記述表現に見る諸要素の抽出と分析 一

学籍番号 199337

氏名 土師 唯我

主指導教員 飯島 敏文

筆者の問題意識

筆者は、過去のボランティア経験や様々な学びを通して、地理的条件の異なる人や時間的条件の異なる人を想像したり、慮ったりできない社会の見方は、如何に社会の構造や体系を正確に捉えていたとしても空虚であると考えている。

様々な先行研究において、「自分ごと」というキーワードが取り扱われている。地球規模の課題に対して、個々人の行動が求められる現代社会において、「自分ごと」は注目すべきテーマである。しかし、管見の限りではあるものの「自分ごと」という言葉について、報告者によってその解釈や意味合いが異なっている現状があると考えている。

研究の目的とそれに迫る手段

本稿の目的は、「社会事象を自分ごととして捉える力」を育むことを狙いとする授業が備えるべき要件について考察することである。学校実習において、社会事象を自分ごととして捉える力の育成を目的として、社会事象に対する強い関心もつための機会や動機を、生徒にどのように育むことができるかという問いを持って社会科地理分野の授業実践を行った。文献研究と並行して、筆者が実践した授業構想の省察とそこで得られた生徒の記述表現を分析することで、「社会事象を自分ごととして捉える力」を育むことを狙いとする授業が備えるべき要件を抽出することに取り組んだ。

授業構想の省察から得られた示唆

授業構想の省察からは、大きく二点の要件が挙げられる。

一点目は、授業の中で、生徒にとっての私的な価値を問う学習活動の必要性である。例えば火力発電が大量の電力を必要とする日本の発電量全体の約八割を占めているという社会事象は、それぞれの生徒にとって幸福な状態なのか、危機なのか、それとも無関心なのか。といった価値を問うような学習活動が必要であったと考える。

二点目は、異なる立場の他者を想像させることの必要性である。筆者の実践で肯定的に評価できる点は、生徒にとって自分以外の他者を少なくとも一つは想像させることができたことである。動画を見せること、意見を発表させてそれを全体で交流することなど、筆者が学習活動として働きかけたことで、生徒が想像した立場に加えて、それをきっかけにまた別の立場の人を想像する生徒がいたであろうことも記述内容から推測される。異なる立

場の他者を想像することには、その他者にとっての価値について想像することが含まれるため、重視すべき要件であると考ええる。

記述表現の分析から得られた示唆

記述表現から得られた要件の一点目は、先述の生徒にとっての私的な価値を問う学習活動の必要性和重なる。生徒の記述内容の比較分析を通して、私的な価値を自覚することができた生徒とそうでない生徒がいた。記述内容の分析は一部の生徒のみを対象としているため、記述内容について全生徒を対象とするような量的な検討は行えていない。しかしながら、授業後に提出された生徒の記述内容には全て目を通していった。その上で、自分にとっての私的な価値を問うたり、自覚したりすることができていた生徒が多数であったとは言えない。このことから、私的な価値を問うための学習活動を授業の中に明確に設定する必要があると考えた。

二点目は、生徒に複数の立場を認識させるためには、異なる価値、または対立しているように見える価値から表出されている立場を授業者が選択し、提示することが重要であるということである。

社会事象を自分ごととして捉えるとはどのような認識か

筆者は文献研究と授業実践、そして授業構想の省察と生徒の記述分析を通して「自分ごと」として捉える認識とはどのようなものか、考え続けた。その認識は、授業実践や省察・分析といった取り組みを通して変化していったと捉えている。取り組み以前は、漠然と社会と自分との関係に気づくことだと考えていた。しかしながら、自身の取り組みに加え、教職大学院でのたくさんの出会い、そしてその出会いから生まれたたくさんの学びを通して、未だ漠然としたものではあるものの、価値や立場といった要件に気づくことができた。筆者は、社会事象を自分ごととして捉える認識とは、社会事象と自分とに対してそれぞれに疑問を持つという認識であり、それらの問いを追究し続けるという継続性が必要である。と考える。

筆者が取り組むべき次の問い

筆者は来春から中学校教員として学校組織の一員となる。その時、「社会事象を自分ごととして捉える力」を育むことについて考え続けた経験は、教員としての武器になると信じている。しかし、実践するにあたって留意しておきたいことが二点ある。一点目は、その力が生徒についたかどうかを総括的な評価として捉えることは適当ではないということ。二点目は、授業で取り扱うテーマは変わるものの、対象を自分ごととして捉えることの本質はテーマにそれほど左右されないということである。

将来出会う生徒、同僚の教員、保護者といった様々な他者について、筆者自身が自分ごととして捉えることを忘れず、「自分ごと」の実践者として精進していく。